

第6章 第Ⅱ部のまとめ

この第Ⅱ部では、今回調査した各設問に対する回答分布を示すことを目的とし、分析は男女別を主として、その他に、都市規模別、警察管区別の回答を比較・分析した。

1. 犯罪被害の実態

回答者本人および家族が被った過去1年間の犯罪被害の実態を調べた。ただし回答は、記入者の自己申告であり、警察が認知した件数とは異なる。この1年間で被害が1件以上あった者は30.3%であった。被害が多かった罪種は、①窃盗、②器物損壊、③住居侵入、等である。

なおこの実態から暗数の推定が第Ⅲ部で予定されている。

2. 犯罪被害に対する不安感

この不安感を各種の側面から調べた。日頃回答者本人が、犯罪被害に対する不安を感じることがあると答えた人は53%、また本人を含めて家族が被害に遭うのではないかと心配がある人は63%に上る。

犯罪種別ごとに、それら犯罪からの被害に遭う不安感の程度と、それら犯罪被害に遭う可能性の認識（リスク知覚）を調べた。不安の高い罪種は、①どろぼう、②自宅敷地への無断侵入、③悪質商法詐欺、④ひったくり、⑤暴行・傷害、がこの順で多かった。

また罪種別リスク知覚が高かった対象は、不安感の高い罪種とほぼ一致していた。

各種犯罪被害に対する不安感とリスク知覚の総量を試算する試みをした。その結果から、総量の程度（高、中、低）によって、対象者を分類し、調査した各項目との関連を分析することとした。男女別では、男性よりも女性の方が不安量、リスク知覚量とも高いこと、都市規模別では、大都市が高いこと、管区別では、関東、東京、中部、近畿で高く、東北、九州、四国では低くなる傾向が見られた。

犯罪被害に対する不安感が生じる場所としては、①通勤・通学・買いもの等道路、②繁華街、③駅・空港、④乗り物の中、⑤公園、の順で高かった。

住まいの地域で不安を感じる対象は、①しつこい勧誘、②暴走族、③少年の粗暴行為、④からまれたり言いがかりをつけられる、等の順だった。

国際的に、各地・社会における体感的治安感尺度になっている、「夜間、地域内独り歩きに対する不安感の程度」を調べた。「非常に不安」と「ある程度不安」を合計すると、ちょうど半分の人がこの範囲に入る。

3. 体感的治安感の動向

住まいの地域の治安に関しては、過半数の人が変化なしと答えたが、良くなったが2%、悪くなったが19%となり、全体的にはやや悪くなったと感じている。特に中部、関東、東京で悪くなったという答えが多い。

一方日本全体に対しては、悪くなったが75%と大多数で、変わらないは19%、良くなったは0.2%だった。自分の地域はともかく、日本全体としては、悪くなったとする見方が大多数の見方である。

4. 防犯対策

まず各個人がどのような防犯対策をしているか調べた。危ない場所に近づかない、鍵をかけるなどの戸締まり、夜遅く出歩かない、の3種が半数を超えていた。男性よりも女性の方が多くしている。その他は比較的少ない。

犯罪被害を避けるために、警察に何をしたいか尋ねた。制服警察官によるパトロールが最も多い他、交番の警察官の常備配置、厳しい取り締まり、の3種が、過半数の人から警察への要望として示された。防犯に役立つ情報と、犯罪発生に関する情報提供にも、4割以上の人から要望された。

地域の安全確保のために、行政に対しては、何を望むか尋ねた。街灯・防犯灯の設置要望が8割近い大多数だった他、被害に遭わない情報提供が5割の人から、防犯カメラの設置と、住民による地域パトロールへの協力が、それぞれ3割程度あった。

防犯カメラの設置に関しては、賛成が8割に及び、プライバシー尊重のために、設置に反対は1割強に止まっている。

地域住民による防犯パトロールは、良い・好ましいとの意見が8割になり、この活動に

否定的な人は数パーセントでしかない。またこの活動に参加したい意志を示した人がほぼ半数になった。

ただしこの活動に既に参加している人は5%程度である。この参加をためらわせる理由としては、忙しい、危険な目に遭いそう、警察がすべきだから、等が多い。

各種防犯対策に対し、重要度の評価を求めた。警察の防犯活動と個人の防犯努力の両者が、とても重要だとの評価になった。それらに対して、自治体の取り組みと、地域住民のボランティア活動が、最重要とはランクされなかったが、無視できない程度には重要だとのランクになった。

5. 少年非行

少年非行の動向、今後問題になる非行内容、非行少年に対する大人からの統制力、非行原因に関する意見等を尋ねた。

現在我が国の少年非行は、量的に増大しているし、質的には悪質化している、との意見が大多数を占めた。

今後問題になる非行問題としては、①シンナー等薬物乱用、②マナー無視の振る舞い、③深夜はいかい、④いじめ、⑤窃盗、⑥暴走族、⑦援助交際、⑧性的な逸脱、⑨飲酒・喫煙、⑩校内暴力、の順になった。

非行（路上で喫煙している）を行っている少年に対して、大人が能動的に注意する意志があるか尋ねた。注意する意志ありは数パーセントに止まり、注意しないと、怖くて注意できないが、合計7割を超えた。

少年非行の原因については、「しつけ・親子関係」が圧倒的に多く、その他、離婚等家庭環境、悪い友人の影響、性・暴力等の欲望を刺激する有害環境、子どもの規範意識・性格、などがそれぞれ2～3割の人から指摘された。

6. 来日外国人犯罪

来日外国人から、直接に被害を受けた人数の暗数推定は、不可能だった。

ただし、来日外国人の犯罪が増加しているとの認識が、大多数の人々に共通している。

その来日外国人犯罪を減少・抑止する方策としては、①不法滞在者の摘発強化、②不法入国者の監視強化、③犯罪取り締まり、④入国審査の厳格化、⑤厳罰化、⑥国外逃亡犯人に対する処罰、⑦外国人労働者の収入確保、⑧外国人との共生を目指した啓蒙、等の順になった。

大方の意見は統制・監視強化の方針だが、援助と共生を求める意見にも、2～3割の人から賛意があった。